

# エジプト社会におけるキリスト教化 —古代末期におけるアコリス遺跡の変遷を中心に—

辻村 純代\*

## Christianization in Egyptian Society —Change of the Akoris Temple in Late Antiquity—

Sumiyo TSUJIMURA\*

### Abstract

There are two opinions concerning the period of Christianization in Egypt. One is that Christianity acted as a substitute for the traditional pagan cult was declining rapidly in the first half of the 3<sup>rd</sup> century, altering the existing social structure centering on a city society to a rural community. The other is that it survived and coexisted with the pagan cult to the 4<sup>th</sup>–5<sup>th</sup> century. In the present paper, the author studied the western temple at the site of Akoris to reexamine the above-mentioned opinions. The temple worshipping Ammon and Souchos (Sobek), controlling navigation on the Nile was supported strong, Roman imperial demand for steady supply of stones and a strongpoint in the long distance commerce in the 1<sup>st</sup> and 2<sup>nd</sup> centuries. Certainly, no stele dedicated by Roman emperors has been found in the temple, likewise temples at other sites after that time. However, amongst the 13 graffiti of the Nile hymn preserved on walls in the hypostyle hall, the 2 graffiti were written at the end of the 4<sup>th</sup> century. In addition, the court of the temple was reconstructed on a large scale after the end of the 3<sup>rd</sup> century. This reconstruction was probably executed by Diocletianus who is known as a persecutor of Christians. Furthermore, just under Dioscuri and a goddess carved on the cliff on the south side of the crag, on the opposite side of the temple, a rock-cut stairs on which many animal bones were scattered and charcoal for sacrifices were found. Judging from pottery and lamps, the pagan rite accompanied with burning is supposed to have been performed from the 1<sup>st</sup> century to the 4<sup>th</sup> century. It thus appears that pagan temple had kept peoples' loyal up to the 4<sup>th</sup> century. The temple area proceeded to suffer from disfiguration by olive oil presses, grind stones of a flour mill and houses after the 5<sup>th</sup> century. If destruction of idols inscribed on ostraca was linked with subversive activities led by Apa Shenoute in the White Monastery, monks may have taken this opportunity to begin living in the temple area. They had fishing right besides managing the olive estate and workshops for making oil. According to other papyrus, a riot which dragged in all of the residents participated happened in 698. It was probably the riot that heralded a rash of riots to protest high taxes in the next century. As a result of the riots, residents became impoverished and at last at the beginning of the 8<sup>th</sup> century Akoris was abandoned.

### はじめに

エジプトにおける古代末期は一般にコプト時代と呼ばれ、王朝時代の伝統的な神々とギリシア・ローマ世界の神々を習合した多神教を脱して、キリスト教世界への転換を果たして以降、イスラーム勢力の支配を受けるまでの時代を指している。ローマ型都市の中心的な役割を担っていた神殿に替わってキリスト教会や禁欲的生活を

\* 国士館大学イラク古代文化研究所共同研究員 (Collaborative Researcher of the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University, Japan)

実践する修道院が人々の信仰の拠り所になり、都市そのものが衰退していく背景には、ローマ本国におけるキリスト教化政策に従った結果ということに止まらない、人々の「心性」の変化があった。P. ブラウンによって切り開かれたこの新たな視点はその後の研究を牽引し、この時代の精神を生き生きと描き出した。そのいっぽう、文字資料や考古資料を使ってエジプト社会の構造的変化を捉えようとする試みも進んでいる。

しかし、エジプト社会にキリスト教が普及、定着する時期については3世紀前半とする説と4、5世紀まで遅れるとみる説があり、未だ定まってはいない<sup>1)</sup>。当然ながら、キリスト教化の指標とする事象の違いや、取り上げる地方によって時期差が生じることは予測される。そこで、本稿では私たちが長期に発掘を継続している中エジプトの小都市・アコリス<sup>2)</sup>の神殿を取り上げ、その変遷を辿りながら中エジプトにおけるキリスト教化の過程を検証してみたいと思う。

### アコリス遺跡と西方神殿

カイロから南へ約250 km、中エジプトの中核都市・ミニアはナイルの西岸に位置する。西岸は氾濫原が広く、オキシリンコス、ヘルモポリスといった古代都市が西方砂漠との境界近くに点在するのに対して、東岸は氾濫原が狭く、東方に広がる岩山砂漠との境界にはナイルと平行する河岸段丘が断続的に連なっている。都市遺跡の多くはこの段丘上に営まれている。ミニアの対岸から北へ約15 km、アコリスもそうした都市の一つで、際立っているのは遺跡の西側中央に聳え立つ巨岩の存在である。巨岩の北麓には西方神殿の多柱室や、北に向かってなだらかに下降する段丘上に林立する泥レンガの壁をアコリスに向かう車窓からも眺めることができる。

都市の規模は南北700 m×東西300 m、周囲は厚い泥レンガの壁で囲まれている。そして都市の西側中央に位置する西方神殿は、巨岩を穿って造られた3つの部屋からなる岩窟部と、その前面の多柱室、2つの中庭、中門と北門とで構成され、神殿域は南北70 m×東西40 mの矩形を呈するレンガ壁で囲まれている (Figs. 1, 2)。多柱室周辺からは第21王朝ピノジエム I 世と第23王朝オソルコン III 世の奉献碑、プトレマイオス朝の王妃ベレニケのカルトウーシュを有する石材が発見され、この神殿が第3中間期から政権と深く結びついていたことがわかる<sup>3)</sup>。

ローマ皇帝による奉献碑も少なくない<sup>4)</sup>。西方神殿に祀られたアモン神とソベク (ソバク) 神に捧げられた奉献碑のみならず、多柱室にはファラオの姿に描かれたネロ帝の浮彫とカルトウーシュ、北門柱にアントニヌス・ピウス帝 (138-161) とコンモドス帝 (180-192) の銘が残る。2人の名前が刻まれているのは、コンモドス帝の時に彫りなおされたからである。アレクサンドリア在の3段櫂船船長の奉献碑も出土した。ローマの軍団が常駐し、プトレマイオス朝以来、良質な石灰岩の供給地としての重要性が知られていたこともあるが、神殿に祀られたワニの姿をもつソベクがナイル航行を司る神であることから、奉献の主たる目的は船の安全な航行にあったと考えられる。大都市アレクサンドリアとの物資輸送だけでなく、地中海からナイルを經由して紅海、そしてインド洋に至る長距離交易<sup>5)</sup> にとって、何よりも交易路の安全確保は不可欠で、そのためにソベク神への奉献が行わ

- 
- 1) Bowman や Bagnall が神殿の廃絶を根拠に比較的早くキリスト教の普及時期を想定するのに対して、Atiya と Brown はキリスト教の普及後も伝統宗教は根強く保持され、両者の対立が続く点を重視する。
  - 2) 王朝時代にはメル・ネフェル、タ・デテネトの名で呼ばれたが、プトレマイオス朝時代以降は遺跡西側の磨崖碑に残るハコリスが転化したアコリスの名称が用いられる [Kawanishi 1995, 周藤 2014]。
  - 3) Kawanishi (ed.) 1995.
  - 4) Lefebvre 1903, Bernand 1988, Kawanishi (ed.) 1995.
  - 5) 村川 1948.

れていたのだろう。しかし、ローマ皇帝による奉獻碑はカラカラ帝（211-217）を最後に途絶える。紅海沿岸の交易都市・ベレニケも3世紀になると遺物の出土がみられなくなるので、ローマ本国における政治的混乱により長距離交易そのものを中断せざるを得なくなったと考えられる。

西方神殿に最後の大規模な修復の手が加えられたのは300年前後と推定される。というのは、中庭に敷かれた石の下層から3世紀末の土器が出土したからである。また、多柱室に残るグラフィティによれば、ナイルの増水をアモン、スーコス、ヘルメス、ヘラの神々に感謝する祝祭の記録は284年に始まり、305年まで続いている<sup>6)</sup>。そこには祝祭を執り行った神官の名前も記載され、この時期の神殿の活況を示している。その頃になると、ベレニケにも往時の賑わいが戻ってくる<sup>7)</sup>。これらのことを勘案すると、298年にエジプトを訪れたディオクレティアヌス帝（284-305）がファイユーム盆地の西端に位置するディオニューシアスやエジプト最南端のフェラエ島の城塞を再建<sup>8)</sup> だけでなく、遠距離交易復活のために中継地として航海の安全に寄与したアコリスの神々を祀る神殿の再建にも尽力した可能性は大きい。

ディオクレティアヌス帝はエジプトを訪れた最後のローマ皇帝であり、財政立て直しのための政策はエジプト人に厳しいものであったが、それよりも彼の名は残酷な宗教的迫害者として、とりわけエジプトのキリスト教徒には忘れがたい記憶と共に脳裏に刻まれている。ローマ伝統の神々への犠牲式の強要や告訴なしでキリスト教徒を拷問にかけられるようにしたのが治世の終盤で唐突の感は否めないが、退位の後も東方で副帝の地位にあったマクシムス＝ダイア（307-324）による、キリスト教徒へのいっそう過酷な弾圧が続いた。そのため、ディオクレティアヌス帝の即位の日である284年8月4日を元年とするコプト暦が生まれ、「殉教者年代」と呼ばれている<sup>9)</sup>。

ディオクレティアヌスの政策からの大転換を図ったのは、306年に登位したコンスタンティヌス I 世（306-337）である。「ミラノ勅令」が発布され、キリスト教が公認されることとなった。同帝に必ずしも伝統宗教を廃絶する意図があったわけではないが、キリスト教の聖職者には公務と納税を免除するという優遇策は大いに人心を揺さぶったに違いない。優遇策は息子であるコンスタンティウス II 世（337-361）によって聖職者のみならず、教会の使用人にまでその対象が拡大され、伝統宗教に対しては公式祭儀とそれに伴う燔祭、偶像崇拜が禁止される。神殿閉鎖命令も出されるのだが、徹底されることはなかった。注意したいのは、崩れた神殿の石材ならば転用を許可したが、神殿や神像の破壊までは認めておらず、それまでのローマ帝国の精神を完全に払拭することには躊躇いもあったのだろう。ここに至ってキリスト教は伝統宗教に取って代わったかに見えるのだが、ユリアヌス帝（361-363）によって再びコンスタンティヌス帝時代の政策、すなわちあらゆる宗教の存在を認めることになる。教会への寄付や聖職者への非課税は廃止され、伝統宗教に対しては神殿の再建、神殿が所有していた土地の返還だけでなく、公式祭儀の復活も許されたのである。

しかし、ユリアヌスは余りにも短命で、急死したのち彼が出した法令は悉く覆されてしまう。そして、アンブロシウスに操られるかのように、テオドシウス帝（379-395）は伝統宗教に対して容赦のない法令を出し、遂にキ

6) IG AKORIS, 40-41 with Bernand, 1988.

7) Sidebotham and Wendrich 1998.

8) *P. Beatty Panop.* I, ディオクレティアヌスはその4年後にアレクサンドリアを再訪し、その直後にキリスト者への弾圧が始まる。

9) 紀元48年にマルコがエジプトにキリスト教を伝えたと言われている。エジプトのキリスト教は初めからユダヤ教的、禁欲主義的、グノーシス主義的要素を有していたため、教義論争が長く続いたが、遂に451年にカルケドンで開かれた世界主教会議で異端とされた。その後、独自の道を歩むことになったエジプトのキリスト教徒にとって、ディオクレティアヌスの迫害はエジプト・ナショナリズムを大いに高揚させる事件であった [荒井 1982]。

リスト教を国教としたのである。すべての神殿を教会に転化し、使われていない神殿の破壊や偶像破壊も認め、公的・私的を問わず一切の燔祭を禁止するという法典の成立がキリスト教徒を勢いづかせたのは間違いない。エジプトでは早速、アレクサンドリアの司教テオフィロスがディオニュソス神殿を教会に改装しようとして異教徒の暴動を誘発した（391年）。

こうして、4世紀末には神殿を廃してキリスト教世界への転換を図る法的整備が完了すると、それに呼応するかのように、305年以降、途絶えていたアコリスの西方神殿に記されたナイル賛歌は4世紀末に2例のグラフィティが加えられただけで5世紀以降の記録はない<sup>10)</sup>。そして、それまで神官によってナイル・フェスティバルが執り行われ、世俗的要素を排除する聖性が保たれていた神殿域には、やがて作業場や一般住居が建てられるようになり、その聖性が失われることになったのである。

ほぼ時期を同じくして、巨岩の南側では、崖に刻まれたローマの双子神・ディオスクロイに捧げられた祭祀も途絶えてしまう。ディオスクロイはゼウスを父にもつ双子の息子たちで、戦場の守り神であると共にソバク神と同じく航海安全の神でもある。中央には馬と女神も描かれている（Fig. 3）。このレリーフの直下、岩山を掘り込んで造られた階段の周辺からはウシ、ブタ、ヒツジ、ヤギなどの家畜を中心に鳥や魚など多数の動物骨が炭と一緒に出土した。これらの動物を供犠として燔祭が行われた跡とみて間違いない<sup>11)</sup>。共伴したランプ35点はその形式から2-4世紀と推定され、5世紀以降のランプは含まれていない。このような伝統宗教に伴う祭祀もテオドシウス法典で禁止されたものの一つであり、アコリスではこれを機に廃止されたと考えられる<sup>12)</sup>。このように、4世紀末から5世紀初頭にかけてアコリス社会には大きな宗教的変化がもたらされ、その後、神殿は直接的な危害を受けることになる。

## 西方神殿の破壊

5世紀代になると、神殿域には一般住居だけでなく、オリーブの搾油施設、製粉施設、窯なども造られるようになり、また大量のコプト織が出土するなど各種の手工業生産が盛んに行われるようになる<sup>13)</sup>。特に、オリーブ搾油施設は神殿域内から4基が発見されており、域外に放置されているものを含めると9基にのぼる。近在の遺跡では同形の搾油施設がヘルモポリスで1基、アコリスから約20 km 南のザウイト・エル・アムワットで5基が確認されているのと比べると格段に多い<sup>14)</sup>。南に遠く離れたパノポリスでも4世紀にオリーブ油が生産されていたことがパピルス文書に残っている<sup>15)</sup>。プトレマイオス朝以来、1-2世紀におけるオリーブ油生産はもっぱらファイユーム地方が中心であったが、3世紀までにカラニスやテアドルフィアなど都市と農村とを問わず急激な

10) Bagnall は3世紀後半にルクソールの神殿が城塞に改変され、また、ヘラクレオポリスやカラニスの神殿が3世紀中葉には廃絶することから、伝統的宗教の終焉をこの時期に当てている。アコリスの西方神殿でナイル賛歌が295年まで残っているのは例外として挙げている [Bagnall 1993: 264] が、実際は4世紀末の賛歌も残っている。

11) Kawanishi (ed.) 2004.

12) 共伴するランプは Pre frog type 及び Frog type lamp に限られている [Tsuji-mura 1995: 268-273]。バーボタインの土器が含まれていることも踏まえると、祭祀は1、2世紀から4世紀まで継続されていたと考えられる。4世紀に行われた動物供犠の例としては、アコリスでの例のほか、ヘルモンティスの鉄器製作者の集団が324-357年にかけてデール・エル・バハリの廃絶された神殿でロバを犠牲として祭儀を行ったことが報告されている [Lajtar 1991]。

13) ワイン造りは農村で行われるのに対して、油製造は都市で行われた (Examples: P. Oxy. LI 3639, P. Panop. 15)。また、穀類については脱穀作業を農村で行い、その後、都市にある製粉所に持ち込まれた [Bagnall 1993: 79]。

14) 辻村 1993, Tsujimura 1995.

15) P. Panop. 1-10, これらの文書は298-341年、都市の周辺についての記載である。

人口の減少がみられ、それと共にオリーブ油も生産されなくなった<sup>16)</sup>。そうだとすれば、それから約1世紀の時を経て、ファイユーム地方からはかなり南に離れた地域にある諸都市でオリーブ油生産が始まったことになる。

搾油の工程は破碎と圧搾に2段階に分かれ、アコリスや周辺の都市遺跡から発見されているのは、いずれも長さ2m、幅1m、高さ1mの直方体をなす大型の石灰岩製圧搾機である<sup>17)</sup>。上面中央には溝で仕切った円盤とその左右に方形の孔がある。この方形の孔は木製の柱を固定するためのもので、2本の柱に横木を渡して圧搾用のスクリーンが取り付けられる。破碎したオリーブの実を包んだ袋を円盤の上に重ねて置き、上からスクリーンを下げていくのである。絞り出された油は円盤の周囲の溝に流れ、片方に伸びた注ぎ口に向かう。これと同じ形式の圧搾機はパレスティナやイスラエルから出土している<sup>18)</sup>。現在の中エジプトではごく稀にしか見ることのないオリーブの木だが、アコリス出土のパピルスにはオリーブの木といった単語がみられるので、かつては都市周辺の農地には多くのオリーブが植えられていたのだろう。

興味深いのは、神殿域から発見されたこれらの搾油施設が都市の廃絶に伴って放置されるのではなく、2個は確実に6世紀後半-7世紀の住居の床下に埋設されていたことである。つまり、オリーブ油の生産は都市が衰退する以前に操業を停止していたのである。これがもしアコリスだけでなく、中エジプト全体で起きたとすれば、商品流通システムに何らかの問題が起きたことが想像される。これに対して、粉挽施設に再利用されたハトホル女神のレリーフを有する柱頭やドラム式円柱を割った石材はそのまま残っており、オリーブ油の生産と違って、粉挽き作業は都市が廃絶するまで継続されたようである。

ところで、石材の再利用はオリーブ搾油や粉挽き施設に限らず、この時代の住居には神殿に使われていた部材が少なくない。再利用石材の研究を行った森川によれば、柱廊を構成していたコーニス、フリーズ、アーキトレブ、柱頭、柱身、礎盤の再利用が確認されるものの、同じ部位を一箇所に集中して利用する傾向はみられないと指摘している<sup>19)</sup>。もし再利用目的で破壊されたのなら、むしろ同一部位は集中する傾向を示すのではなかろうか。

神殿部材が再利用された時期はある程度の推測ができるが、供給先である神殿の破壊の時期を直接に記した資料は見つかっていない。ただし、神殿破壊が行われたことを伝える文字資料はある。それは神殿域内から出土したオストラカ2例で、神殿破壊が石材入手のためではなく、明らかにキリスト教徒が異教を抹殺するという意図をもって破壊したことがわかる内容である。アコリス出土の文字資料の解読にあたったJ. ジャリによれば、この神殿破壊は“白の僧院”の修道院長であったシュヌーテ(350-c. 466)の影響を受けた修道士たちによって行われた組織的な行動だった可能性があるという<sup>20)</sup>。もし、そうであるとすれば、破壊は5世紀前半に行われたとみるのが妥当であろう。そして氏の推定どおりであるなら、破壊から再利用の時期までにはかなりの期間を要したことになる。その期間が長ければ、部材の集積や移動などによって各種の部材が混合されることは自然であり、森川の先の指摘とも合致する。多くの住民に伝統宗教、神々への畏れの気持ちが未だ強く残っていた時期に行われ

16) ファイユーム地方で急激な人口減少をもたらした理由に疫病が挙げられる。“アントニウスの疫病”と呼ばれる悪疫が166/7年にエジプトで再流行したからである。ルキウス ウェルス帝(在位161-169)の軍隊によってエジプトに持ち込まれ、デルタのメンデス州で人口の急減が起こり、ファイユームのアルシノエでは149/50年と170'年代の間で、人口は3分の1にまで減少し、近くの村では179.年にたった1か月のうちに神官の数が3分の1にまで減ったことが知られている。また、Rathboneによると、ファイユームの西端に位置するテアドルフィアでさえ急減するのは、疫病による死亡というよりも、疫病を避けて逃げ出した可能性があるという[Bowman 1986: 142-147, Rothbone 1990: 114-119, Sharp 1999: 185]。

17) 円筒形の破碎機はアコリス調査隊が実施しているニューミアの石切り場で発見されている。

18) Frankel 1999: 122-137. イスラエルの類例についてはYeivin 1982, 1984を参照。同書ではエジプトの採油やワイン製造、及びそれぞれの施設については触れられていない。

19) 森川 2012: 59-74.

20) Jarry 1995: 363-373 (Ostraca Nos. 21, 22).

た破壊行為であったために、その直後に住居の基礎や壁に再利用することを躊躇わせたのだろうか。しかし、時を経て再利用する際には、神の頭部を有する石材のこごとくを逆位に置いており、伝統宗教に対する明確な拒絶を表しているかのようにみえる。

キリスト教の国教化への経緯をみてみると、神殿の破壊は神殿石材の教会建築のための再利用という目的と強く結びついている印象を受ける。シュヌーテの修道院に建つ教会にも神殿石材が使われており、エジプトでもこうしたスポリア研究の進展が待たれるのだが、アコリスではこれまでのところ、教会や修道院とみられる建築物は発見されていない。その意味で注目されるのは、西方神殿の岩窟部周辺の遺構群である (Fig. 4)。岩を削って造られた大人ひとりが入れられるほどの幾つかの狭い空間と、床に掘られ食べあるいは水を蓄えたかみえる円錐形の穴の並びである。この狭い空間が修道の場所、すなわち僧坊であるなら、神殿破壊の目的は一層鮮明になるからである。

## 5世紀の中エジプト

アコリスの神殿破壊に大きな影響を与えたとみられるシュヌーテとは、どのような人物だったのだろうか。初期の禁欲的単性主義者として知られるアントニウス (250-355) やバコミウス (292?-346?) が世俗を嫌って砂漠のなかで修業生活を送ったのに対して、彼らよりも約半世紀後に生まれたシュヌーテが修道院長として様々な社会的事件に遭遇し、その時々にも果敢な行動力をもって異教と異端に立ち向かったエピソードは少なくない。

彼の修道院には2,200人の男と1,800人の女がそれぞれに分かれて厳しい規則の下で暮らしていた。ある時、遊牧民のブレンミュス族の襲撃から逃れてきた2万人にも及ぶ避難民が救いを求めて修道院に押し寄せてきた。後を追ってきたブレンミュスは避難民を保護したシュヌーテを捕えて殺そうとするが、シュヌーテは彼らの腕を枯れ木のように動かなくさせてしまう。驚いたブレンミュスの王は部下たちの腕を元に戻すように懇願し、代わりに彼の要求を聞き入れた、と伝えられている<sup>21)</sup>。このエピソードは、奇跡を起こしたか否かは措くとして、彼が世俗を離れて教義論争にのめり込むタイプの人間ではなく、勇猛な遊牧民にも立ち向かう行動派であったことをよく示している。

そうした姿勢は遊牧民に対してだけでなく、近在の異教徒にも向けられる。修道院の対岸に位置するパノポリスは4世紀には住民の5%が神官であったと言われ、5世紀のなっても伝統宗教を守る人々が少なくなかったようである<sup>22)</sup>。シュヌーテは他の修道士たちと諮ってその町にあるパン神を祀る神殿を襲い、呪術関係の本を奪った罪で神官から訴追されたことがある。また、パノポリスに住む異教徒の地主の家を襲うこともあった<sup>23)</sup>。これらのエピソードは5世紀前半の都市には活動を続けていた神殿が存在し、それを支える異教徒の存在を明らかにしているが、いっぽうで神殿とはいえ最早かつてのような公的祭儀の場としてではなくなり、伝統宗教は呪術という極めて私的な信仰へ軸足を移していたことも判明する。

また、5世紀代にはキリスト教徒化されていない遊牧民がしばしばナイル河岸の住民を襲い、教会や修道院とも事件を引き起こしたけれども、彼らにとって相手がキリスト教徒であるか否かはそれほど問題ではなかった印象を受ける。

21) *WChr.* 6 (425/50) *Corpus Scriptorum Christianorum Orientalium* Vol. 42 §22: 69, Sidebotham, Hense and Nouman 2008: 368.

22) Borkowski 1975: 43.

23) Bowman 1986: 192.

## 遊牧民との抗争

有力な遊牧民としては、シュヌーテのエピソードに登場するブレンミュス族の他にノバダエ族が知られており、彼らは上エジプトのナイル河岸から東砂漠にかけて広く活動していた<sup>24)</sup>。東砂漠は良質な石材や金・エメラルドなどの貴重な鉱物資源に恵まれており、特にブレンミュスは古くからエメラルドの採掘に従事していた。いっぽう、ローマにとっても東砂漠はナイルと紅海とをつなぐ交易路であるだけでなく、コンスタンティヌスの母ヘレナと娘のコンスタンツィアの石棺に使われるほどに美しい紫斑岩を産出するモン・ポルフィリテや片麻岩を産出するモン・クラウデヌスという大規模な採石場を有する重要な地域であった<sup>25)</sup>。5世紀に操業を停止するまで東砂漠ではローマ軍との大きな争いは発生していないが、ナイル河岸ではノバダエを巻き込んだ大きな争いが発生する<sup>26)</sup>。

ノバダエは289年、ヌビアの都市を攻略するためにローマ軍に招聘されて以降、国境最南端のこの地の防衛に就いていたのであるが、テオドシウス帝がフィラエ島のイシス神殿を閉鎖すると、ブレンミュスと共同して上エジプトを攻撃し、島にあるイシス神殿を占拠する事態となり、占拠は長期に及んだ。452年、ローマの将軍マクシムスによって追い出されたのちは南のヌビアで異教世界を守ったが、6世紀中葉にはキリスト教を受け入れ、ノバダエが支配するヌビアでは神殿の多くが教会に改築された。

また、彼らとは別に、リビア砂漠では4世紀から修道院が営まれていたデルタの西砂漠ワディ・ナトロンに襲撃を繰り返していた遊牧民、ベルベル族が活動していた。彼らが独自の太陽信仰を捨てキリスト教に改宗するのは、ブレンミュスやノバダエに比べると1世紀ほど遅れる。631年、彼らがオキシリンコスの西方、カラムンの修道院にいた証聖者サムエル(596-695)を誘拐し、サムエルを彼らの村に連れ去るという事件が起こる<sup>27)</sup>。伝承によると、彼らはそこで執拗にサムエルに棄教を迫るが、彼は決して信仰を捨てることはなかった。ある日、部族長の妻が病に倒れて太陽神に祈るも効果がないのでサムエルが呼ばれる。キリスト教の神の力で無事、妻の病気は治癒し、彼は3年に亘った拘束から漸く解放されてカラムンの修道院に戻ることができた。子どもができなかった族長夫婦にさらに請われてサムエルが祈ると男の子が生まれ、これらの奇跡がベルベル族の改宗を決意させた、という。ここでもシュヌーテの場合と同じく、キリストの奇跡がテーマとなっているのだが、重要な点はリビア砂漠の遊牧民が改宗するのはブレンミュスやノバダエ族よりもかなり後だったということである。

## アコリス出土のパピルス

アコリス・西方神殿域出土のパピルスには、教義に関することや農業関係のほか、当時起こった事件についても記録されており、遊牧民に関連する資料が少ない。パピルス90例のうち、西側中門付近から出土している63例についてはそれ程大きな年代の隔たりがないとすれば、7世紀後半と推定される。その中で、次に挙げる遊牧民を巡る事例はその後のアコリスの廃絶につながる可能性がある事例よりも時期的には早い。

それは遊牧あるいは半遊牧的な暮らしをしている一族とアコリスの修道院と間に起きた事件をあつかっている<sup>28)</sup>。

24) Sidebotham, Hense and Nouman 2008.

25) Peacock and Maxfield (eds.) 2001 and 2007.

26) Sidebotham, Hense and Nowman 2008: 368.

27) Alcock 1972: 17-22.

28) Jarry 1995, Papyrus No. 61.

発端は、北に移動中の一族がアコリスの近傍にさしかかった辺りで、そのなかの若者が魚と保存されていたイチジクを盗んだことだった。投網による密漁は、すぐに漁撈権を有している修道院に知らされたが、彼はまだ逮捕されるに至っておらず、示談によって解決が図られようとしている。彼が未だ若かったためか、一族の長が交渉相手である。要求したのは盗んだイチジクの返還に加え、貨幣による弁償と彼らが連れてくるブタ、馬、ロバだった。ブタが含まれているので、彼らはイスラーム教徒ではなく、キリスト教徒だろうと J. ジャリは指摘しているが、ベルベル族のように独自の信仰をもっていた可能性もある。出土パピルスに灌漑施設や農産物に関する例がみられるので、アコリス修道院が都市の周辺にかなりの農地を所有していたことは確実であるが、この資料によって漁撈権も有していたことは確実である<sup>29)</sup>。そして、この盗難事件については禁を犯した者に対して公権力が表に出ず、片方の当事者である修道院が事件の解決にあたっていることが注目される<sup>30)</sup>。

アコリスに起きたもう一つの事件は、密漁事件に比べるとはるかに重大、かつ深刻であった。アマレサイトというアラブの一族の名前が複数のパピルスに現れる<sup>31)</sup>。小片なので仔細はつかめないのだが、687年と記した資料には、アラブとアコリス住民との衝突により住民複数人が捕えられ、うち一人が死罪となった事件を記している<sup>32)</sup>。そして2年後の689年、おそらくこの事件に関係した大規模な暴動が発生する。修道士や大地主を中心としたアコリス住人たちと、ジャイフルという名の首領に率いられたアラブとの戦いで、多数の住民が犠牲となった、と公務員とおぼしきイスラーム教徒・アンタルが手紙に書き残している。また、あまりの重刑に怒りを露わにした修道士の手紙も残っている。

アムル＝イブン・アル・アスに率いられたアラブ軍によってエジプトが征服され、フスタートに新都が建設されるのが642年なので、この事件はイスラーム政権下で起きた暴動である。しかし、征服当初、アラブの多くはフスタートやアレクサンドリアに定住し、彼らが農村地帯に広がって居住するようになるのはヒジュラ暦1世紀以降、8世紀前半以後であるから、彼らと在地のコプト農民が直接にぶつかり、抗争事件に発展するとは考えにくい。しかし、コプト農民に対する徴税が過酷であったために、8世紀になると各地で抗租反乱が繰り返され、その鎮圧に当たった政府軍による大規模な殺戮は村落破壊を招いたと言われている。そうであれば、アコリスで起きた暴動はその先駆けとも取れる。そして、8世紀初頭の陶器片が出土するとはいえ、少量にとどまることから、7世紀末に起きたこの暴動事件と事後の処罰の厳しさがアコリス廃絶の理由として浮かび上がってくるのである。しかし、それが住民の意志であったか、行政処分によるものであったかは不明である。

## ま と め

それまでの伝統宗教を捨てキリスト教を中心とした社会を形成した古代末期のエジプトの実相を明らかにするために、本稿では中エジプトの小都市アコリスを中心に検討した。カラニスやテプテュニスといったファイユーム地方の諸都市でみられる急激な人口減少と都市の放棄は既に2世紀後半からみられ、カラニスにあった2つの

29) 5世紀になると、教会、修道院、中級官僚が新たに地主として台頭してくる [Banaji 1999: 203]。土地の所有権、水利権のほかに、アコリスのように漁業権も所有していた可能性がある例としてパウイート修道院が挙げられる。そこではワイン造りのほかに魚の酢漬けを作っていたからである [Bagnall and Rothbone (eds.) 2004: 177]。

30) 公権力の低下はアナスタシウス帝（在位491-518）が行った徴税業務の改革に伴って急速に進む。パガーチと呼ばれる徴税人が地主達に私的に雇われ、6世紀代のエジプトは中央政府の統制がきかない社会であったとリーベンシュッツは推定する [Liebenshuetz, 1973: 38-46]。

31) Jarry 1995: 343, Papyrus No. 53, 57. ジャリはこの部族はイスラーム教に改宗した東砂漠の遊牧民と推定している。

32) Jarry 1995, Papyrus Nos. 38, 46 recto and verso, 54, 55, 70, 73.



神殿はどちらも3世紀末以前に放棄される<sup>33)</sup>。加えて、ヘラクレオポリスの神殿に使われている石材の持ち出しやルクソール神殿内に残るグラフィティが示す伝統宗教の衰退などはいずれも3世紀に認められることから、これまで比較的早期にキリスト教的社会に転換したかのように語られてきた。しかしながら、アコリスでは3世紀に遠距離交易の中断によって衰退期を迎えながらも4世紀になって神殿が修復され、神殿を中心にナイルフェスティバルが催され、また燔祭を伴う公的祭儀も継続されている。こうした例は決して少なくないと推察される。

アコリスの西方神殿における宗教上の大きな変化は4世紀初頭ではなく、むしろ5世紀代に認められる。一つは神殿での偶像破壊であり、他方は神殿域内への一般住居の進出、及びそこでのオリーブ油の生産をはじめとする手工業生産の開始である。どれも神殿のもつ聖性を否定する行為であり、それは都市におけるキリスト教の受容を意味している。シュヌーテと彼に導かれた修道士たちが神殿を襲ったエピソードは非キリスト教徒の存在を示している。シュヌーテと彼に導かれた修道士たちが神殿を襲ったエピソードは非キリスト教徒の存在を示している。シュヌーテと彼に導かれた修道士たちが神殿を襲ったエピソードは非キリスト教徒の存在を示している。シュヌーテと彼に導かれた修道士たちが神殿を襲ったエピソードは非キリスト教徒の存在を示している。

アコリスだけにとどまらず、5世紀になると他の都市でも変化が認められる。ナイル西岸の大都市、ヘルモポリスの中心に配置されたローマ的建造物の一つであるバシリカ内部に教会が造られ、そこから南西28km離れた砂漠には天使、キリストを抱くマリアや弟子たちを描いたフレスコ画で知られるパウイト修道院が創設されている。さらに、アンティノポリスにも教会と、その南方にアプー・ヒンネス修道院が創設され、中エジプトの様相は一変する。しかし、それはバグナールが描いたような農村共同体への移行とはならなかったのである。なぜなら、アコリスは以前と変わらぬ規模を保持し、都市の内部は家屋が密集する都市的景観を維持していたからである。もし、そのなかに陰りを見出すとすれば、都市的産業であったオリーブ油の製造が放棄されたことであろう。都市としての廃絶は8世紀初頭、アコリスだけでなく、大都市であったヘルモポリスも突然に放棄される。その理由については、これまで地震説<sup>34)</sup> や内因説<sup>35)</sup> などが提案されたが、確証は得られていない。本稿で取り上げたパピルス資料が示す暴動を含めて再検討を行う必要がある。

## 参考文献

- Alcock, A.  
1972 *Life of Samuel of Kalamoun*, Oxford.
- 荒井 献 (Arai, K.)  
1982 「コプト教会」前嶋信次・杉 勇・護 雅夫編『渦巻く諸宗教』(オリエント史講座3)
- Atiya, A.S.  
1968 *A History of Eastern Christianity*, London.  
1991 *The Coptic Encyclopedia*, 8 Vols., New York.
- Bagnall, R.S.  
1993 *Egypt in Late Antiquity*, Princeton University.

33) ミシガン大学の発掘調査によると、南神殿は250年、北神殿は3世紀末以前にそれぞれ廃棄された、と推察されている [Boak 1993: 16 and 21]。

34) Bailey 1991.

35) 川西は地震による壊滅の可能性を否定はしないが、再建する動きがみられないことから都市という多消費型社会の活力が残されていなかったことに重点を置く [Kawanishi (ed.) 1995: 473-483]。

- Bagnall, R.S. and D.W. Rothbone (eds.)  
2004 *Egypt from to the Copts*, American University, Cairo.
- Bailey, D.N.  
1991 *British Museum Expedition to Middle Egypt-Excavations at El-Ashmunain IV, Hermopolis Magna: Buildings of the Roman Period*, London.
- Banaji, J.  
1999 Agrarian History and the Labour Organization of Byzantine Large Estate in Bowman, A.K. and E. Rogan (eds.), *Agriculture in Egypt*, Oxford, 193–216.
- Bernand, E.  
1988 Inscription grecques et latines d'Akôris. *Bibliothèque d'étude* 103, Cairo.
- Boak, A.E.R.  
1933 *Karanis: The Temples, Coin Hoards, Botanical and Zoological Reports, Seasons 1924–31* (University of Michigan Studies, Humanistic Series 30, Ann Arbor).
- Borkowski, Z.  
1975 *Une Description topographique des immeubles à Panopolis*, Warsaw.
- Bowman, A.K.  
1986 *Egypt after the Pharaohs*, London.  
1991 *The Coptic Encyclopedia*, 8 Vols., New York.
- Brown, P.  
1975 *The Making of Late Antiquity*, Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (2006 足立広明訳『古代末期の形成』慶応義塾大学出版会)  
1981 *The Cult of the Saints: Its Rise and Function in Latin Christianity*, Chicago University.  
1982 The Rise and Function of the Holy Man in Late Antiquity, *Society and the Holy in Late Antiquity*, 103–152.  
1992 *Power and the Holy Persuasion in Late Antiquity: Towards a Christian Empire*, University of Wisconsin Press.
- Frankel, R.  
1999 *Wine and Oil Production in Antiquity in Israel and Other Mediterranean Countries*, Sheffield, 122–137.
- Jarry, J.  
1995 Papyrus Texts and Ostraca in *Akoris Report 1981–1992*, 330–373.
- Kawanishi, K. (ed.)  
1995 *AKORIS-Report of the Excavation at Akoris in Middle Egypt 1981–1992*, The paleological Association of Japan, Inc., Egyptian Committee, Kyoto.
- Kawanishi, H. and S. Tsujimura (ed.)  
2004 *Preliminary Report Akoris 2003*, University of Tsukuba.
- Lajtar, A.  
1991 Proskynema Inscriptions of a Corporation of Iron-workers from Hermonthis in the Temple of Hatshepsut in Deir el-Bahari: New Evidence for Pagan Cult in Egypt in the 4th Cent. A.D., *JJurPap* 21, 53–70.
- Lefebvre, G.  
1903 Sarcophages Égyptien Trouvés dans une Nécropole Gréco-Romaine à Tehné, *ASAE* 4, Le Caire.  
1921 La fête du Nil à Achôris, *BSAA* 18, 47–59.
- Liebenshuetz, L.H.G.W.  
1973 The Origin of the Office of the Pagarch, *Byzantinische Zeitschrift* 66, 38–46.
- 森川愛美 (Morikawa, A.)  
2012 「中エジプト・アコリス遺跡の転用例にみる諸問題」『先史学・考古学研究』(筑波大学) 第23号 59–74

森本公誠 (Morimoto, K.)

- 1975 『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』 岩波書店  
 1987 「エジプトの土地所有とアラブ支配」 木村尚三郎, 他編『中世の農村』(中世史講座2) 257-278

村川堅太郎 (Murakawa, K.)

- 1948 『エリユトゥラー海案内記』 生活社

Peacock, D.P.S. and V.A. Maxfield (eds.)

- 2001 *Survey and Excavation Mons Claudianus 1987-1993, Vol. 2 Excavations, Part 1*, Cairo.  
 2007 *The Roman Imperial Quarries Survey and Excavation at Mons Porphyrites 1994-1998, Vol. 2: Excavations*, London.

Rathbone, D.W.

- 1990 Villages, land and population in Graeco-Roman Egypt, *PcPhS* 216, n.s. 36, 103-42.

Sharp, M.

- 1999 The Village of Theadelphia in the Fayyum: Land and Population in the Second Century, in Bowma, A.K. (ed.), *Agriculture in Egypt from Pharaonic to Modern Times*, Oxford University, 159-192.

Sidebotham, S.E. and W.Z. Wendrich (eds.)

- 1998 *Berenike 1996: Report of 1996 Excavations at Berenike (Egyptian Red Sea Coast) and the survey of the Eastern Desert*, Leiden.

Sidebotham, S.E., M. Hense and H.M. Nouwens

- 2008 *The Red Land: The Illustrated Archaeology of Egypt's Eastern Desert*, Cairo.

Spencer, A.J.

- 1983 *British Museum Expedition to Middle Egypt: Excavations at El-Ashumunein I*, London.  
 1989 *British Museum Expedition to Middle Egypt: Excavations at El-Ashumunein II*, London.

周藤芳之 (Sudo, Y.)

- 2014 『ナイル世界のヘレニズム』 名古屋大学出版会 234-245

Tsujimura, S. (辻村純代)

- 1993 「古代エジプトのオリーブ油生産」『古代世界の諸相』 晃洋書房 434-456  
 1995 Olive Oil Production in Akoris in *Akoris Report 1981-1992*, 464-472.  
 1995 Chronology of Pottery Lamps in *Akoris Report 1981-1992*, 268-273.  
 1995 Chronology of Mud Brick in *Akoris Report 1981-1992*, 265-268.  
 1996 「アコリスの都市生活」 金関 恕・川西宏幸編『都市と文明』(講座4「文明と環境」) 朝倉書房 173-189

Yeivin, Z.

- 1982 Korazin, Excavations and Surveys, in *Israel* 1, 64-67.  
 1984 Korazin, Excavations and Surveys, in *Israel* 3, 66-71.

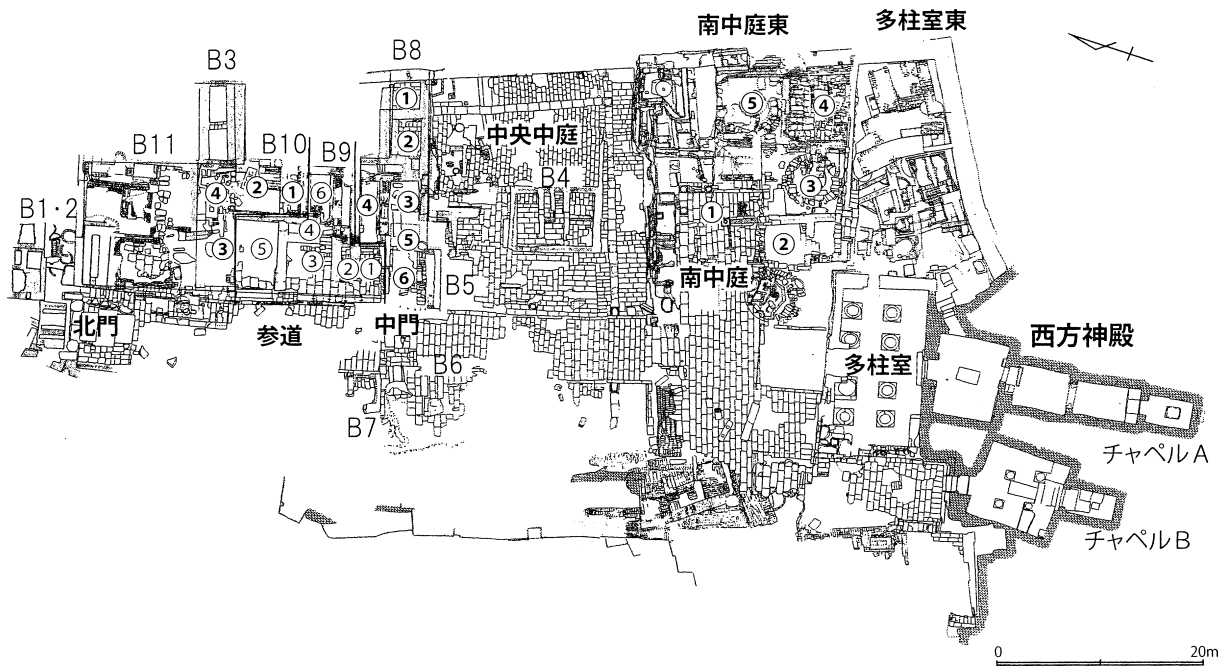


Fig. 1 西方神殿全体図 (Kawanishi and Tsujimura 1995を基に森川が遺構名称を日本語に変換)

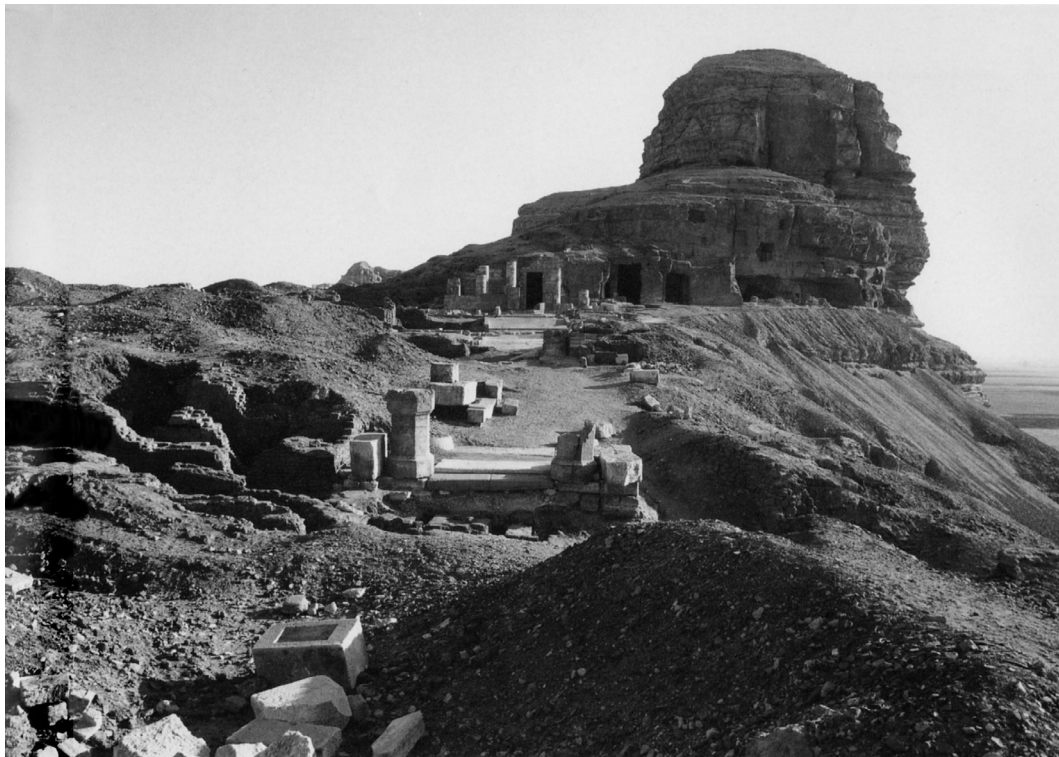


Fig. 2 西方神殿 (北から)



Fig. 3 デイオスクロイのレリーフ



Fig. 4 修道士の僧房